



## 連載エッセイ



～霊園に仙台ゆかりの人々をたずねて2～



### 加藤陸奥雄（1911～1997）

自然に触れるよろこびを生涯失わなかった生態学者



西大立目 祥子

加藤陸奥雄先生がお元気であれば、今年100歳になる。この大地震と大津波の深刻な被害をご覧になったら、何とおっしゃただろう。「自然を甘く見ちゃいかんよ。人間の想像力をはるかに超えた存在なんだからな」。私には、生態学者として鋭い観察眼を自然に向け続けた先生のそんな言葉が聞こえるような気がする。

明治44年、白石の生まれ。幼少期に仙台に移られてからは、連坊小、旧制二高、東北帝大で学ばれ、長兄の多喜雄先生（化学）、次兄の愛雄先生（物理学）とともに東北大学教授として活躍された。昭和46年から6年間は東北大学学長を務められ、退官後は、初代の大学入試センター長や宮城県美術館長も歴任している。まさに学都仙台を代表する学者の一人だった。

多喜雄先生とともに仙台市科学館や仙台市野草園の設立に尽力されたことは前号にも記したが、仙台市が、公害が問題となっていた昭和40年代に全国に先駆け「杜の都の環境をつくる条例」や「広瀬川の清流を守る

条例」を制定し得たのは、自然環境の保全を考え続けた陸奥雄先生の存在があったからではないか、と推測する。

私は幸運にも、平成9年3月に亡くなるまでの最後の1年間、月1回ご自宅にうかがって、長年の研究や自然への思いを拝聴する機会を得た。ある講演会で先生が「僕は仙台に育てられた」と話されるのを耳にし、仙台と自分自身とのかかわりをそんなふうに表現なさったことに俄然興味が湧いて、押しかけるようにドアをたたいたのである。



先生は気さくで、茶目っ気があって、人間的魅力にあふれていた。これだけの要職につきながらも、捕虫網を持って蝶を追いかけた少年の頃のナイーブな自然への興味や畏怖が、生涯を通して胸のうちに輝き続けていたのだと思う。大正時代から、中山や台原など戦後に団地開発された丘陵地に出かけ、尾根を上り谷を下り、地形を体に刻みつけながら蝶を探し歩いたという。仙台の市街地周辺に豊かに広がっていた広葉樹の森が、まるでゆりかごのように一人の昆虫生態学者を育てていくようすがイメージできた。このころの採集の成果は「仙台市でとれた蝶類」(1935年)としてまとめられている。これは仙台市内の蝶についての初めての本格的な調査である。

先生は上からの決断を下す際も、生態学者としての見識を忘れなかった。片平から川内へ東北大学が移転した際には、建物の設計変更をさせて敷地内の樹木を1本も伐らせず、扇坂周辺の雑木林も開発から守り抜いた。まちの中のどの自然をどんな状態で残さなければならないか、を知りつくしていたのだろう。

ひな祭りに、お手製のひな壇に毛氈を敷き、日本各地の郷土玩具を並べて楽しそうに職人さんたちの話をしてくださった姿も忘れがたい。

今年12月2日は、お世話になった何人かで、100回目の誕生祝いをして差し上げたいと思っている。



自宅2階には、こけしをはじめ長年の調査旅行で集めた郷土人形がぎっしりだった。1995年撮影。墓碑は西12区。

西大立目 祥子（にしおおたちめ・しょうこ）  
フリーライター。地元学の視点で仙台のまちや広瀬川について執筆している。著書に『仙台まち歩き』（河北新報出版センター）。